

特集①「歴史と地理をつなぐ2」

地理講師として思うこと

——教員研修セミナーに登壇してこれまでのこと

宮路 秀作

代々木ゼミナールでは毎年、春期と夏期に「教員研修セミナー」と題したセミナーを開催しています。これは、高等学校の先生方にご参加いただき、日頃、われわれ代ゼミ講師がどのような授業を展開しているのかという情報を提供し、教科指導力の向上に繋げていただくことを目的としたものです。私は、2011年より、夏期の教員研修セミナーを担当しています。今回は、これまでの教員研修セミナーでいただいた受講者アンケートを読み返し、先生方が持っていらっしゃるお悩みを共有し、それに対して私が思うところを述べたいと思います。

アンケートを読み返し、まとめ作業をして先生方が抱えているお悩みとして、主に以下の三つのことが見えてきました。①専門ではない地理を教えることになり、授業運営に困っている、②論述問題、地形図の判読に関する指導法に困っている、③「地理総合」が必修化されることの影響の三つ。これについてお話す前に、まずは地理という科目について、私が考えることを述べてみます。

1. 専門ではない地理を教えることになり、授業運営に困っている

1) 私が考える地理という科目

これがもっとも多いお悩みでした。そもそも、「地理とはいったい何を学ぶ科目なのか？」や、「地理を教えるということは、いったい何を教えればいいのか？」といった疑問は、当然お持ちのことと思います。私のように、大学で地理学を修め、その後地理を教えることを生業にしている先生は決して多くありません。だからこそ歴史を専門とする先生が地理を教える上で困っていることを、地理の側からサポートできればと思っています。それが今回、本誌にて筆を執らせていただくことになった背景です。

まず、私の個人的な意見としてあるのが、「地理と歴史は自動車の両輪のようなもの」ということです。ここで、「地理学とはなんぞや!？」といった学問の話をしたいわけではありません。また、私は学士を有しているに過ぎないので専門的なことには言及できません。あくまで、高等学校で設置されて

いる「地理」という科目についてお話したいと思います。そもそも、地理とは「現代世界そのものを学ぶ科目」です。地球という大きなスケール、各地域・各国という小さなスケールでそれぞれ自然環境が展開し、それを土台としてそれぞれに最適な形で文化が形成されていきます。これらが連鎖して一つの物語が形成されます。これを「景観」といい、地理とは現代世界に存在するさまざまな「景観」を一つ一つ丁寧に学んでいく科目です。また、「景観」とはさまざまなスケールにおいて展開します。国単位のスケールで展開する「景観」があれば、大陸単位のスケールのももあり、そして世界規模のスケールのももあります。要するに、地理とは「地球上の理」なのです。

私は新学期の最初の授業で、「地理とは適宜最適なスケールで『景観』を捉えることが大事である」と生徒に伝えています。次の問題は、普段、代々木ゼミナールの東大クラスでの最初の授業で生徒に解かせる問題です。

問1 50,000分の1地形図と5,000分の1地図を使って水田分布の状況を捉えた場合、それぞれのスケールに応じてどのような事象を考察することができるか説明しなさい。

問2 研究対象地域をマイクロにす

ればするほど、なぜ地理の初學者は「地理とはなんぞや？」という疑問を抱くと考えられるのか説明しなさい。

問1は、「スケールに応じて、考察できるものが異なる」ということをテーマにした問題です。50,000分の1地形図は、扇状地や河岸段丘などの地形との関係、水路やため池などの灌漑施設との関係、水田の拡大などを考察することが可能です。一方の5,000分の1地図は、家屋と水田との距離、耕作地の形状、農道の整備状況などを考察することが可能です。このようにまずは、「スケールの概念について」教えるところから始めています。問2では、研究対象地域がマイクロになればなるほど、構成する事象が細分化することを理解させます。細分化した事象が相互に関係性を持つと、他のさまざまな学問の見地も必要となってきますので、本格的に地理を勉強した生徒は、「いったい、どこまでが地理なのか？」という疑問を持つようです。だからこそ、私は思うのです。「地理とは『現代世界そのものを学ぶ科目』である」と。地球上に存在するありとあらゆる「景観」を学びます。もちろん、46億年前のできたばかりの地球ではありません。現代の地球です。このように現代世界を学ぶことで初めて、「なぜ、

そうなのだろうか？」とか、「なぜ、今があるのだろうか？」といった疑問がわいてきます。その疑問を歴史に求め、深い解釈を加えます。地理と歴史是不可分な関係にあります。いわば、「自動車の両輪のようなもの」であって、どちらが欠けても自動車は動かないのです。まず、地理を教える先生方にはこの認識を持って欲しい、「各時代の地理の積み重ねが歴史」なのだとして欲しいのです。私が、2017年2月に上梓した拙著『経済は地理から学べ！』（ダイヤモンド社）は、この「景観」を意識して書き上げました。「景観」を捉えるヒントになると思いますので、是非お求めください。

さて、次の問題は、2017年度大阪大学前期試験地理にて出題された問題（大問Ⅱ問1）です。

エジプト・メソポタミア・インダスの古代文明地域における、気候と地勢にかかわる共通点と文明形成に対するそれらの影響について述べなさい（150字程度）。

さて、この問題を見て、「これって、歴史の問題じゃん！？」という感想をお持ちでしょうか？もし、そうならば地理に対する偏見、もしくは、地理という科目をやはり良く理解していないこととなります。先ほども言いましたように、「各時代の地理の積み重ね

が歴史」なのです。つまりこの問題は、古代文明が栄えた時代の「地球上の理」なのです。

2) まずは自然地理を理解しよう！

まずローカルルールとして、大学受験において地理を選択しておらず、大学で歴史学を修めたけど地理を教えることになった先生を便宜上、「歴史の先生」と呼ぶこととします。「歴史の先生」は、地理という科目の枠組みが、「系統地理（自然地理・人文地理）」、「地誌」、「地図」の3系統から成ることを意識されていない可能性があります。意識していたとしても、まず「自然地理」を教えるところで最初の壁に当たるようです。確かに、受験生時代に地理を受験科目で選択していない「歴史の先生」に、「なぜそこに火山が存在するのか？」や、「なぜ雨が降るのか？」といった自然現象を教えるのは難しいでしょう。

例えば、「ノルウェーの海岸付近にはフィヨルドが形成されている」といった事実だけを授業で教えても、生徒はこれを暗記するだけになってしまいます。実際は、ノルウェーというよりは、「スカンディナヴィア半島西岸」にフィヨルドが形成されていることが重要です。フィヨルドはそもそも「かつての氷食地形が沈水して形成された地形」である以上、大陸氷河ができるほど寒冷（ある程度の高緯度に位置）で、かつある程度の降水量が認められる場

所にできるということを理解させなければなりません。「ある程度の高緯度」ですから、そこは偏西風帯です。偏西風は西寄りの風ですので、山脈の風上側、いわゆる山脈の西側で地形性降雨が見られ、これが氷河のもととなります。しかし、「歴史の先生」は、「偏西風は西よりの風?」、「地形性降雨?」、「そもそも沈水って何?」といったところから始まります。しかし地理というのは、やはり最終的には事実を繋げて「景観」を作り出していかなくてはなりません。フィヨルドが発達しているということは、水深が深く、波が穏やかであるため、天然の地形を利用して港を建設することができます。いわゆる「天然の良港が発達する」といわれる話ですね。またノルウェーの沖合では、東グリーンランド海流と北大西洋海流が会合して潮目を形成し、またバンクが形成することを背景に、ノルウェーは古くから漁業が盛んな国です。ノルウェーの自然環境を土台として教え、その上でどのような生活様式が見られるのかを考察する。これが地理です。そう考えると、「歴史の先生」が躓つまづいているのは、初歩の初歩の部分であることがわかります。「自然地理をどうやって学ぶか?」は一旦置いておき、「自然地理を学ばなければならない」ということは理解していただけたと思います。

3) 単なる受験指導にとどまらず、そ

の先を見据えて指導をしたいけれどどうすればよいか?

地理は「現代世界を学ぶ科目」である以上、世界中の大きささまざまなスケールで展開する「景観」を学びます。そのため汎用性が高くなります。自分が責任を持って預かった生徒を、賢く育てたいという気持ちは十分すぎるほど理解できます。しかし、地理をしつかり教えれば、それだけで次代を読める基礎の一端が養われます。「歴史の先生」のアンケートに、「知識を繋げて説明すると、生徒はそれを雑談と捉えてしまうことがあり、途端にアンテナを降ろしてしまう」というものがありました。きっと、「景観」を作りきれなかったのだと思うのです。先ほどのノルウェーの「景観」についても、天然の良港から、かつてバイキングがノルウェー周辺も活動拠点にしていたという話に繋げることができます。また人口が約500万人と少ないため国内需要が小さく輸出余力が大きいため、原油や魚介類の輸出が盛んであるという話にも繋げられます。しかし、生徒がアンテナを降ろしてしまうということは、そもそも生徒側に「面白い話を面白いと捉える力」がない可能性があります。ここに理由を求めるのは教員として大変悔しいことですので考えたくはないと思いますが、現実には現実です。であれば、生徒の身近な話題にまで降ろして知識を繋げていけば良いの

だと思えます。

4) 自分が疑問に思うことは、生徒たちも疑問に思う

「自分が疑問に思うことは、生徒たちも疑問に思う」、これは私が大学4年時の教育実習で、指導教官に教えていただいた言葉です。「衝撃！ ブロッコリーはね、実は野菜なんだよ！」くらいに、ごく当たり前のことなのですが、実は案外忘れがちです。なぜなら、先生は「知らないことは教えない」という裏技を持っているからです。生徒は、「先生は何でも知っていて当然！」と思っていますが、われわれだって人間ですから、知らないものは知りません。しかし、そこをしっかりと勉強して蓄積していくことが何よりも重要だと思うのです。勉強する→教えてみる→いまいちじっくりこない→再び勉強してみる→上手く授業できた！を繰り返していくのだと思えます。しかし、それでも数年経つと「数年前の自分は本当に授業が下手だったなあ……」と振り返るものです。代々木ゼミナールは教室の授業の様子を、サテライン放送で全国の代ゼミ各校舎、サテライン予備校に配信しますので、動画として残ります。それを見ると、5年前の自分の授業がいかにか下手だったかと、精神的に凹んでしまいます。実は「教わる」より、「教える」の方が数倍学びの効率が良いと思えます。ですから、「知らないから教えない」の

ではなく、教えてみましょう。

2. 論述問題、地形図の判読に関する指導法に困っている

次に多かったお悩みは、論述問題、地形図の判読に関する指導法に困っているということでした。これは「歴史の先生」というより、「地理の先生」だったり、ある程度の年月、地理を教えていらっしゃる先生方に多いお悩みでした。

1) 論述問題の指導法

論述問題で最も重要なことは、「相手（採点者）に一発で意味や内容が伝わる日本語で書くこと」です。実は、ごく当たり前のこのことを理解している受験生は多くありません。そのため、知識があれば書けると思っています。これは東京大学や京都大学、一橋大学のような難関国立大学を目指す受験生においてもそうです。後日、受験した大学から呼び出されて、「これはどういう意味で書いたのかな？」といったすり合わせはありません。そのため、文字だけでしっかりと伝えなければなりません。となれば、そういう文章を作る訓練をしなければなりません。

30字であろうが、400字であろうが、文章の作り方は同じです。まずは出題者が、どのスケールで問うているかを把握しなければなりません。例えば、「東京の気温上昇」について出題された場合、東京という狭いスケールで問

うているわけですから、地球温暖化について言及するわけにはいかず、ヒートアイランド現象について書かなければなりません。「書いていることは正しいけど、出題者が要求していないことを書いている」から得点できないという状況ですね。スケールを正しく捉えることは、地理においては何よりも重要なのです。

文章を作る時は、まず「骨子」を決めなければなりません。「絶対に言及しなければならぬ内容」ですね。「骨子」を決めたならば、あとは出題者が要求する字数に応じて、「枝葉」を増やしていきます。日頃から受験生の答案用紙を見ていると、「自分の頭の中にある知識の何を引っ張ってくれば書けるだろうか？」という姿勢が目立ちます。それでは論述問題で得点はできません。「何を書かなければならないのか？」をしっかりと捉え、骨子を決めます。これは、いわばゴールです。そこから、「なぜ？」と因果関係を遡っていきます。どこまで遡るか？ それは字数で決められます。ゴールを決め、字数に合わせてスタート（書き始めの内容）を決めるというわけです。

2) 地形図の判読に関する指導法

地形図の判読に関する指導法もまた、よくあるお悩みのようです。本来、地形図というのは多色刷りで作られたものです。大学受験では、2013年以前に発行された3色刷の地形図が今でも

多く使用されています。しかし、北海道大学を除いて、基本的にはグレースケールで描かれたものが使用されます。要するに、等高線をはじめ、河川や道路なども黒い線で描かれます。地形図に触れる機会が少ない受験生にはなかなか難しい。私は、授業では地形図をA3サイズ（大きければ大きいほどよい）に拡大コピーして、黒板に貼り、それにチョークで色をつけながら判読しています。最初から色を入れたものを配布するより、自分で色を入れていくことに意味があります。生徒たちは、これで地形図が読めるようになっていきます。そもそも論として、大学入試において正式の多色刷りのものを使用してくれることを願います。グレースケールのものを使用するという事は、差はわずかながらも実際の地形図の判読は違う技術が要求されることになります。理想をいえば、電子黒板に映し出された地形図に色を入れながら解説できると良いです。そこは、ご用意できる環境に応じて対応されたら良いと思います。

3. 「地理総合」が必修化されることの影響

1) 地理は覚える量が少ない？ 理系向き？

2022年より、「歴史総合」、「公共」とともに、「地理総合」が新設されて必修化されます。これは「歴史の先生」

だけでなく、「公民の先生」が初めて地理を教えることになる状況が予想されます。「歴史の先生」が地理という科目をどのように捉えているかという点、「覚える量が少ない」、「地理は理系向き」といったことが大半を占めています。これは、そもそも「歴史の方が覚える量が多い」、要するに知識を問うような入試問題が大半を占めているからそのようにお考えなのでしょう。特に私立大学を中心に、「これは、もはやクイズ王決定戦ではないか?」と思わせるような入試問題が数多く見られます。それに対応するために、先生方は「これは入試に出る! だから覚えよう!」という授業をされているのではないかと思います。しかし、「地理は覚える量が少ない」といわれていますが、決してそんなことはありません。結構覚える量は多いです。しかし、「知識」というより「景観」が問われる入試問題が多いため、気づいたら覚えていたということが多いだけで、意識して暗記しなければならないものは実は多いです。しかし、これは一長一短あって、「景観」が問われるから、それを構成する知識が1, 2個欠けていても、なんとかなることがあります。ですから、地理は「考えればなんとかなる」という幻想が生まれ、「地理は思考する科目、だから理系向き」といった発想しか生まれられないのだと思います。

2) 地理教育はセンター試験準拠ではない!

現在、地理を選択する生徒の多くが理系です。そのため、高等学校で開講されている地理の授業は、実質的に「センター試験で高得点を狙ったもの」になり下がっている現状があります。しかし、地理教育とはセンター試験準拠で展開するものではありません。例えば、①イスラム教徒は、宗教上の理由で豚肉を食べない、②北アフリカ諸国にはイスラム教徒が多いという知識から、③北アフリカで豚の飼育はほとんどみられない、と推察します。①と②の知識から③に導くことを「地理的思考力」と誤魔化す風潮がありますが、これらはすべて単なる事実の羅列に過ぎません。結局は、知識の獲得に過ぎないのです。このようなことばかりをしてしても、生徒たちに思考力は身につけません。「思考する」とは、「答のない難題を突破するために知恵を絞ること」であり、具体的に言えば、①～③の事実を基礎に未来を読んでいくことが「思考する」ということです。「地理的思考力」などというものは存在しませんし、この言葉に逃げこむのは、地理を教えるものとしていかなるものかと思います。

3) 地理と歴史は、自動車の両輪のようなもの

各時代の地理の積み重ねが歴史なのであれば、地理は歴史の最新のページ

と言えます。生徒たちは、大学生にならば自ら「正解」を見つけていかなければなりません。例えば、ガンダムの図面をどれだけ覚えているかを競うのではなく、実際にガンダムの図面を作った人が次代を創ります。そういう人間に育てていくために、社会系科目を教えるわれわれが何をすべきかをしっかりと考える必要があります。歴史は万能ではありませんし、地理も万能ではありません。縦横無尽に地理と歴史を教えられる、そんな先生になることが求められています。そして、先

生方はそれぞれ、地理や歴史を通して、生徒たちに伝えたいことがおありと思います。その琴線を大事にされて、授業して欲しいと思います。何かに寄り添うのではなく、先生方が発信源となる授業を展開してくださることを期待しております。

(みやじ しゅうさく／

代々木ゼミナール講師)



いま学ぶ アイヌ民族の歴史

加藤博文・若園雄志郎=編

高等学校での日本史の枠組みを基礎において、古代・中世・近世・近代そして現代の時代ごとに北海道島と先住民族であるアイヌの歴史をまとめた書。日本史の授業に役立つテキスト。

B5判 164頁 本体2,000円(税別)
ISBN978-4-634-59103-5